

青身魚

能村 研三

季語「夜の秋」の使い時

曲がるたび風新しく聖五月

一振りに被る手拭ひ草むしる

二階には二階の匂ひ更衣

失ひし時間をおもふ更衣

朴残花高き葉騒を聞いてをり

墨あはき形代にして悔いるかな

酔に殺す青身魚や半夏生

曝されし中に手擦れの和綴本

雛僧の鼻梁てらてら雨安居

降りさうな晴れさうな空檮咲く

俳人協会のホームページの「今日の一句」の句を抽出するのに、毎年戸惑う季語がある。「今日の一句」はその日の季に合わせて句を選ぶのだが、「夜の秋」の季語は夏なので立秋前の日に句を選ばなければならぬ。「秋の夜」は秋の季語で、「夜の秋」は夏の季語であることは、俳人にとっては周知のとおりである。歳時記の解説には「夜の秋」とは、「晩夏 日中はうだるように暑いのに、夜になると、秋の兆しが漂う」夏の夜に感じる秋の気配という意味であり、秋の夜のことではない。「立秋に先駆けて用いる夏の季語である。古くは「秋の夜」と同じく秋夜をさしたが、近代以降、夏の季語に転じた」とある。

山本健吉著の『基本季語五〇〇選』によれば、「科学的な厳密さをたてまえとしていている人たちは、こういう気分を主とした季語にはなじめないのである。『夜の秋』を夏の季語とすればこそ面白いのであって、秋の季語だったら何の変てつもないはずだ。温度計の目盛を標準にしていえば不合理だろうが、秋を感じるの

何も言はず妻倚り坐る夜の秋

登四郎

この句について登四郎の自註句集には「子供（長男一）の初七日も過ぎた夜。泣いてばかりいた妻も泣かなくなった。只黙って書きものをしてる私の近くに坐った。妻の哀しみが伝わってきた。」と書いている。

この句は昭和二十三年の作で句集『咀嚼音』に収められている。兄爽一が亡くなったのはこの年の八月二十五日で、それから一週間後の初七日の夜であるから、唇の上では秋で、句集にはこの句の前後に「露」「秋虹」などの季語などの句も並べられているので完全に登四郎は秋の句として作っているようだ。「夜の秋」の句の初出は大正に入ってから原石鼎が作った句を虚子が選んだものだそうだが、俳人の季節感の繊細さが生み出した季語であると言えよう。

能村 研三